

1. しかし、苦しみのあった所に、やみがなくなる。
先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、
後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは光栄を受けた。
2. やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。
死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。
3. あなたはその国民をふやし、その喜びをまし加えられた。
彼らは刈り入れ時に喜ぶように、分捕り物を分けるときに楽しむように、あなたの御前で喜んだ。
4. あなたが彼の重荷のくびきと、
肩のむち、彼をしいたげる者の杖を、
ミデヤンの日になされたように粉々に砕かれたからだ。
5. 戦場ではいたすべてのくつ、血にまみれた着物は、焼かれて、火のえじきとなる。
6. ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。
ひとりの男の子が、私たちに与えられる。
主権はその肩にあり、
その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。
7. その主権は増し加わり、その平和は限りなく、
ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。
今より、とこしえまで。
万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。

説教

イザヤ書9章は有名なメシヤ預言です。人類の救い主イエスキリストが「ひとりのみどりご」としてお生まれになることを預言したものです。

イザヤは紀元前8世紀にユダで活躍した預言者です。イザヤの時代に大国アッシリヤが攻めてきて、ユダの兄弟国イスラエルは滅ぼされてしまいます。そして、そのアッシリヤの勢いは止まることを知らず、遂にはユダにも攻め入り、エルサレムを包囲するに至りますが、ユダの善王ヒゼキヤの祈りを聞かれた神さまは、天使を送って一夜にしてアッシリヤの陣営18万5千人を打ち殺し、たまたま退却したアッシリヤの王セナケリブを、その二人の息子の剣で打ち殺し、こうしてユダ王国を存亡の危機から救い出してくださったのでした。

しかし、話はそこで終わりません。せっかく神さまに助けてもらったにもかかわらず、神さまに背き続けるユダ王国は、神さまのさばきを受けて、約二世紀後の紀元前6世紀に新興国バビロンによって滅ぼされ、この地上から消滅してしまいます。

これはイザヤの時代のことではありませんでしたが、イザヤは預言者として特別に神さまからこのことを教えられていました。それでイザヤは頭を痛めます。嘆きます。だからイザヤ書には嘆きが満ちています。それは神のことばを委ねられた預言者イザヤの嘆きであり、同時に、彼を世に遣わされた、神さまご自身の嘆きでもありました。

それでは、果たしてユダに未来はないのか。神の民、祭司の王国としてこの世に神の栄光をあらわすべく遣わさ

れているイスラエル、ユダの民は、単に自分の罪のために滅ぼされて世界の笑いものになるための存在なのか、それが預言書最大の問題です。

人は底なしに罪深い、義なる神はそれを審判せずにはいられない、ならば果たして人に救いはあるのか。イスラエルはおのれの罪深さの故に神に滅ぼされて地上から消滅した。そしてユダも今やそれと同じ道を行こうとしている。確かに、一時的には神さまに立ち返って、神さまに救済されることだろう。しかし、再び不信仰に逆戻りして、遂には神のさばきを受けて滅び失せる。そうなれば、預言者のいのちがけの働きも空しく、人々は自らの不信仰のために神のさばきを受けて、この地上から完全に滅び失せてしまうのです。一体この世のどこに希望があるのでしょうか。どこに人類の希望があるのでしょうか。そして、特別に神の民として召されたイスラエルの望みは、どこにあるのでしょうか。

それはあります。地上の望みが完全に滅び失せたその先に、永遠の神の希望があるのです。その望みは地上の希望ではありません。天上の希望です。天から与えられる希望です。人が努力してコツコツと築き上げる希望ではなく、神さまがただ一方的に私たちのところに与えてくださる希望です。人の希望ではない、人間的な希望ではなく、神の希望、とこしえに揺るがない神の希望です。それが「ひとりのみどりご」を通しての希望でありました。

まず、預言者は、最も深い暗黒の中にある、「死の苦しみ、悩み、悲惨、恐怖」の中にあつた「異邦人のガリラヤ」に「大きな光」が照り輝くと預言します(1)。

1. しかし、苦しみのあつた所に、やみがなくなる。

先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、
後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは光栄を受けた。

2. やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。

死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照つた。

「やみ」とは神のことばを知らず、あるいは知ろうとせずに神の恵みもみこころも知らないことを意味します(8:17-22)。

3~4節では、無知蒙昧のため死にゆく者を巨大な天上の光が明るく照らす時のありさまを、預言者は興奮して「あなたは…」と叫びながら、「刈り入れ時」の仮庵の祭りにたとえ、さらには300の兵士を率いて12万のミデヤン軍を一網打尽に打ち破つた勝利の日にたとえます。

3. あなたはその国民をふやし、その喜びをまし加えられた。

彼らは刈り入れ時に喜ぶように、分捕り物を分けるときに楽しむように、あなたの御前で喜んだ。

4. あなたが彼の重荷のくびきと、

肩のむち、彼をしいたげる者の杖を、
ミデヤンの日になされたように粉々に砕かれたからだ。

5. 戦場ではいたすべてのくつ、血にまみれた着物は、焼かれて、火のえじきとなる。

そして、この天上の巨大な光とは「ひとりのみどりご」の誕生でした。

6. ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。

ひとりの男の子が、私たちに与えられる。

主権はその肩にあり、

その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

6節の冒頭には、「というのは(その理由は)」を意味する接続詞がついています。どうして嬉しいのか、刈り入れの時のように喜び溢れているのか、ギデオン率いる300の兵がミデヤン軍を打ち破つた時のように嬉しいのか、

「その理由は」となるわけです。

その大喜びの理由は何か。「**ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。**」ということになります。

その「大きな光」となる「ひとりのみどりご」とはどんなお方か、預言者イザヤは、それは「男の子」とであると
言います。そして、その子は「私たちのために」生まれると言います。

6. ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。

ひとりの男の子が、私たちに与えられる。

主権はその肩にあり、

その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

その名は、人知を超えたことをアドヴァイスする「不思議な助言者」です。語ったことは必ず成し遂げる「力ある神」です。罪深い私たちを見捨てることなく守り助ける「永遠の父」です。そうしてこの罪と滅びに満ちた世界に永遠の神の国を打ち立てる「平和の君(責任者・指導者・支配者・王子・官僚)」と呼ばれるというのです。天地宇宙万物の主権(支配)をその肩に担うそのみどりごは、滅び失せた「ダビデの王座に着いて、その王国を治め」ます。かつての、罪で滅びた王国とは正反対に、神のみこころである律法に従って「さばきと正義」により、ご自分の王国を揺るがないものとして確立させます。その支配はいよいよ前進して止まることを知らず、遂にはとこしえの神の国を完成させるに至ります。

そして、最後に、この果てしのない事業は、人間の努力によらず、万軍の主の熱心・情熱・執念によって成し遂げられると預言者は言います。人の不信仰もこれを妨害できません。もしも人がこれを妨害するなら、「ひとりのみどりご」は、それを打ち砕き、討ち滅ぼしながら、永遠の神の王国を打ち立てていかれます。ここに、預言者の伝えたい、唯一無二の希望があるのです。

私たちも同じではないでしょうか。この時のイスラエル、ユダの状況と同じではないでしょうか。危機的な状況にあり、それを打開しなければならぬのに、自分の罪深さの故にそれがうまくいかず、たとえ一時的に悔い改めて、一時的に状況を打開できたとしても、やがては罪の故に神のさばきを受けて、永遠に滅びてしまいます。これが誰にでも当てはまる人間のどうしようもない現実なのです。

でも、預言者イザヤがここで伝えたいことは、地上に何の望みもない、そのような罪深い私たちのために、神さまが永遠の救いの希望をお与えくださった、ということです。それが「ひとりのみどりご」を通して与えられる天の希望でした。それは初めは甚だ小さいかもしれませんが。無視すれば無視することのできる、「ひとりのみどりご」から始まります。でも、その「みどりご」は、実は、この世の歴史を支配しておられる天地万物の主であられます。それで、その永遠の王国の支配はいよいよ拡大して、この地上を神の国に新しく造り変えるまで止むことはないのです。

私たちは、この「ひとりのみどりご」による救いと支配が、この私に、教会に、そしてこの地上になされるよう祈りましょう。そして、みなさんの住むこの世界に、大きな光が、さばきと正義が、神さまのみこころが、そして「いのち」と「平和」がもたらされていくよう、主の御名により祈ります。